



進修同窓会 HP にアクセス

西行庵跡



新緑萌える金輪王寺・南朝(吉野朝)皇居跡
(高5回飯村弘撮影)

桜川2 ～日本の花「桜」～

春になると、日本人の誰もが、桜の開花を待ち望み、花見を楽しんでいるように、桜は、日本人にとっては、切っても切れない花となっています。特に、平安時代以降は、紀友則、西行、本居宣長などの詩歌を通して、日本人の心のシンボルともなっていました。

敬称を略し、引用文中の旧字体は新字体に改め、筆者による註記を【 】内に付け加えました。

日本の花「桜」

MIHOMUSEUM(滋賀県甲賀市信楽町)館長・和食文化国民会議会長の熊倉功夫は、『学士會報第92号』(2017年11月発行)「和食文化を再考する」の中で日本人と桜の古代からの関わりについて、次のように述べています。

「……ユネスコに提出する『和食の世界無形文化遺産登録に向けた』提案書を書く際、和食の基本的精神として『自然の尊重』を挙げました。どこの国も自然を尊重していませんが、日本人の自然観はアニミズム【生物・無機物を問わない、全ての物の中には、霊魂が宿っている、という考え方】に支えられています。具体例を挙げると、花見です。満開の桜の下で宴を開くのは、日本人だけです。しかも梅や藤の花の下では決して花見の宴をしません。桜はそれだけ日本人にとって特別な花なのです。」

民俗学では、桜の「さ」は農業が始まる時に山から下りてくる農業の神様の名前です。「五月」「早苗」「早乙女」など、四月・五月にちなむ言葉にも「さ」音が付きます。一方、「くら」は岩座(いわざ)や神座(かみざ)と一緒で、「いる所」を意味します。つまり、「さの神のいる所」が桜です。日本の神様は目に見えないので、山から下りてきても分かりませんが、昔の人は桜の開花に、神様が下りてきたという知らせを感じたのです。満開の桜には神様が居るのだから、神様に今年の豊作を約束してもらわなければいけません。そこで、「さの神」をもてなします。日本人のもてなしは「馳走をすることなので、食べ物や酒をお供えます。そのうち、お一人での食事は寂しいでしょうから、一緒に頂きましょう、芸能も披露しましょう」となり、花見の宴へと発展したのでしょう。

このように、神様をお迎えして一緒に食べる神人共食が、日本の年中行事における食の根幹だと考えます。これが和食の基本にある日本人の自然観です。『静心(しづこころ)なく花の散るらむ』
平安時代の歌人で、『古今集』の撰者でもあった紀友則(845?~907)が詠んだ「ひさかたの光のどけき 春の日に 静心なく花の散るらむ」
(こんなに日の光がのどかな春の日なのに、落ち着いた心が無いので、桜の花は散っているのだろう。)
は、『古今集』の中でも特に名歌とされ、古文の教科書にも広く採用されています。本校での授業でも学びましたが、先生の講義も上の空で、浅はかにも、「散る花に名残を惜しむこともあるまい」と、思っていました。

大学に入り、京洛の岸に散る桜花を何度見ても、友則の思いにはなれず、祇園田山公園の夜桜の下での新歓コンパでは、毎年、高歌放吟し、大騒ぎをしていました。が、この歌だけは何かインパクトされていて、散る花を見るたびに、「ひさかたの……」が思い浮かびました。それでも若い頃には、何の感慨も湧きませんでした。が、還暦を過ぎた頃から、散りゆく桜の寂しさ・切なさを、さらには無常観をも感じるようになりました。40年以上も経って、師の教えが分かるようでは、何とも不肖の弟子ですが、「桜の美しさ、特に散る桜の美しさを日本人が認めるきっかけとなったのが、この歌である。」と、やっと気づいた次第です。それでも、自坊にある樹齢100年近いソメイヨシノが舞い散るのを見ても、「ああ、」との思いには、まだ至りません。

願はくは 花のもとにて
平安時代以降、花といえは桜を指すようになっただけでしたが、その桜への思いを宗教的信仰に近いものにして高めたのが、平安後期の歌人西行(1118~1190)名佐藤義清のりきよ。元北面武士。1140年、23歳で出家して西行と称した。です。彼は生涯、月と花とに心を勞し、月や桜の歌を多数詠んでいます。中でも次の5首には、彼の生と死についての考え方がよく表れています。

「ゆくへなく月に心の すみすみて 果てはいかにかならむとすらむ」(『山家集』)
(輝く月の面をあてどなく眺めていると、心がどこまでも澄んできて、気が遠くなる。このままいくと、私の心はどうなってしまうのだろう。)

「吉野山 こそゑの花を 見し日より 心は身にも はずすなりにき」(『山家集』)
(吉野山の梢の花を見た日から、花に憧れる私の心は身を離れて、自らの憧れに向かつて、漂い出てしまった。)

「願はくは 花のもとにて 春死なむ その如月(きさぎ)の 望月(もちぎ)の頃」(『山家集』)
(願うのは、桜の花の咲く下で、春に死ぬことだ。あの、お釈迦様が入滅なさった陰暦2月満月15日頃に。)

「来む世には 心のうちに あらはさむ 飽かて やみぬる 月の光を」(『千載集』)
(来世では心のうちに思い浮かべよう。どんなに見ても見飽きることのなかった月の光を。)

「仏には 桜の花を たてまつれ 我が後の世を 人とぶらはば」(『千載集』)
(仏となった私には、桜の花を供えてほしい。私の後世(ごせ)を誰か弔ってくれるならば。)

上田三四二(註)は、『この世この生』(新潮文庫)の「花月西行」の章で、「西行は月と花とを『現世の景物』【けいぶ】でありながら現世のものともおもわれぬ感動を呼びおこすもの、それに対【むかひ】うとあやしい浮遊感につれてゆかれ、陶酔に誘われるもの、美感としか名づけようがないために仮にそう言っておくが、人のこころを至美、至純、至極の境にむかつて押しあげ、昇りつめさせるもの、そしてそこでは時間が空虚ではなく充【み】

ちており、充ちることによって時間を忘れさせるもの、そういう蠱惑【こくわく】人の心をあやしい魅力で惑わすこと】の源として月と花への憧れを語っているののである。「と述べています。「至美、至純、至極の境」にはとても達することはできませんが、それでも、吉野山奥千本西行庵から、眼下に金峯山寺藏王堂を眺めながら、上千本、中千本へと下る道すがら、舞い上がり、舞い散る花びらに包まれると、西行ならずとも、「心は身にもそはずなりにき」との不思議な陶酔感に誘【さそ】われていきます。「吉野山……」の歌には、吉野の桜を見れば、少なからず共感できますが、他の4首は、とてもその思いには至れません。

「願はくは……」の1首も、『山家集』に収められている、死の10年以上も前の作です。上田三四二は前掲書で、「……西行は実際の死より十年以上も前に辞世の歌を詠み、以後、春ごとに望月の花の下で——如月十五日は釈迦入滅の日にあたるが、この世における花の爛漫月の清明を仏道成就の道しるべとして、彼岸に渡ることを心に期してきたのである。」と述べ、さらに「願はくは」の一首は、死への憧れを語っているのではない。死をも輝かしいものとする月と花を語っているのである。」と記しています。

その願い通りに、西行は1190年2月16日、河内弘川寺【かわひがわら】において、73歳でこの世を去りました。そして、月を供えるのは無理だろうから、「心のうちにあらはさむ」とするので、せめて、「仏には桜の花を たてまつれ……」と、後の世の供養者への要請をも詠んでいます。上田によれば、「……死者としての意志の表明なり供養者への要請なりが、月と花という、彼が生前、いのちにかけて憧れわたった美の景物であるということだ。言いかえれば西行の死後は、彼の生前の延長として考えられ、そのよう

ありたいと希望されているのである。」(前掲書)と述べています。

西行にとっては、月と花とは、死後の世でも無くてもはならぬ景物なのです。しかし、供えてくれという桜は年中咲いているものではないので、供養者にとっては、厄介な要請ではあります。

上田は前掲書で、「一首の歌、一人の歌人の死が世人に与えた衝撃のほどははかりしれないものがあつた。」と述べていますが、没後、撰【まよ】ばれた『新古今集』には、最多の94首が採られ、慈円、藤原定家、後鳥羽院、さらには500年後の芭蕉など、後世の多くの歌人・俳人が、西行の作品をその人生と併せて敬慕してきました。まさに、西行の死によって、桜は日本人の心を捉えて放さない花になった、と言えるでしょう。

(註)上田 三四二(うへだ みき) 1923~1989)

昭和期の歌人、小説家、文芸評論家。内科医。専門は結核。医学博士。

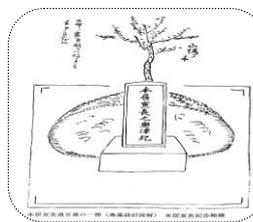
敷島の 大和心を

西行に劣らず、桜(山桜)をこよなく愛したのが、国学者の本居宣長(1730~1801)です。宣長は伊勢国松坂(三重県松阪市)の人で、医業の傍ら日本の古典を研究し、国学を大成させました。特に、『古事記』の研究に没頭し、35年を掛けて『古事記伝』44巻を著しました。

小林秀雄は、その著『本居宣長』(新潮文庫)の中で、「宣長ほど、桜の歌を沢山詠んだ人もあるまい。」「宣長という人がどんなに桜が好きな人であつたか、その愛着には、何か異常なものがあつた。」と記しています。

宣長は、死の1年ほど前の1800年7月に、遺言書を書き残しましたが、世間一般のものとは異なり、自分の葬式、墓地、命日の供養に関する事ばかり書いています。葬式は何事も粗末に質素でよろしいと繰り返し言っていますが、墓地につい

ては、念の入った説明を加え、そこに植える桜の木は「質素に」とはいきません。



本居宣長墓(上)
宣長奥墓設計図解(下)



本居宣長 61歳自画自賛像

志き嶋の やま登許、路を 人登ハ、朝日尔、ほふ 山佐久ら花

原文(拡大)

松阪市郊外にある山室妙楽寺の裏山に造った、約2m四方の墓地の真ん中少し後ろに塚を築いて、その上へ桜の木を植え、塚の前には石碑を建てること。塚の高さは90cm、120cm程、塚の上には芝を伏せ、崩れないように随分堅く致し、折々見廻つて、もし崩れている所があつたならば、修復せよ。と書き記し、「植候桜ハ、山桜之随分花之宜キ【よろしき】木を致吟味【ぎんみいたし】植可申候【うべくまうしきふらふ】、勿論後々もし枯候は、植替可申候」と、植える桜木にだけは一流の品を注文し、後々もし枯れてしまったならば、同様の木を植え替えること、と念を押しています。さらに、花盛りの桜の木が植えられた墓の図まで描いています。もし供養者が桜を手向けてくれないと寂しいから、自分で植えておこうというわけです。

『玉勝間』「六の巻 花のさだめ」では、「花はさくら、桜は、山桜の、葉あかくてりて、ほそきが、まばらにまじりて、

花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず、……」とまで記しています。

1790年、61歳の時に自画自賛した肖像画(遺言書には、祥月命日に、この肖像画を彼の書斎「鈴の屋」の座敷床【とこ】に掛けて、供養をするように、とも書かれていた。)には、有名な

「敷島の 大和心を 人間はば 朝日に匂ふ 山桜花」(註2)

(大和心とはどういうものかと人が尋ねたなら、それは、朝の陽の光を浴びて、匂うように美しく咲いている山桜のようなものだ、と答えよう。)の歌が、その賛として書かれています。宣長はこの歌で、「朝日に照り映える山桜は実に清々しく、明るく、美しい。そして、それを「ああ、美しい。」と素直に感じる心が、大和心だ。」と言つたに過ぎません。

しかし、宣長以降、復古神道によって、桜は、「日本のシンボル」「日本人の心のシンボル」とされていきます。そして桜は、愛国心の象徴とされ、「敷島の……」の歌は、戦前、宣長が考えていた以上に、もてはやされ、潔く散るのが日本人、という思想が生まれました。神風特別攻撃隊の最初の4部隊が、この歌から、「敷島隊」「大和隊」「朝日隊」「山桜隊」と名付けられたことは、よく知られています。

結果的に、桜に強烈なイデオロギーを付け加えたのは宣長ですが、それは、彼の意図したことではありません。ただ、宣長は、「桜を一種の呪物として死後を現世につなぎ、黄泉【よみ】の闇を破るもの」(上田三四二前掲書)として、特別な思いを抱いていたのです。

(註)敷島の 大和心を 人間はば 朝日に匂ふ 山桜花
戦前、現在の土浦市桜町一帯が造成された際に、土浦駅前に既に大和町があったので、宣長のこの歌を踏まえ、敷島町・朝日町・匂町、小桜町が生まれた。山桜を小桜とした理由は不明。現在は、町名変更により、その4町は、桜町となっている。

(高21回 松井泰寿)